

ごあいさつ

東京都渋谷公園通りギャラリーは、このたび、展覧会「今村遼佑×光島貴之 感覚をめぐるリサーチ・プロジェクト〈感覚の点P〉」(会期：2025年2月から5月予定)の開催に先立ち、プレイベントを開催します。

プレイベントでは、「感覚」についての対話を続ける美術作家・今村遼佑と全盲の美術作家・光島貴之が、作品展示とゲストを招いてのワークショップを行います。作品展示では、プレイベントのために制作した新作や、2023年に京都で開催された展覧会「今村遼佑×光島貴之〈感覚の果て〉」(アトリエみつしま Sawa-Tadori)の出展作品などをご紹介します。さらに、このたびのワークショップを通して交わされる感覚にまつわる交流の記録は、2025年に開催する展覧会において、作家が新たに制作する作品や映像資料のかたちで展示・報告を予定しています。

このように本リサーチ・プロジェクトは、今村と光島が感覚をめぐる交流した経験を引き受けつつ新たなプロジェクトとして、より多くの方々と交流する場へと開いていくことを試みるものです。プレイベントを皮切りに、2025年の展覧会に向けて、出展作家をはじめとした表現者や研究者など、さまざまな分野のエキスパートの方々や、ご来場の皆様と共に、他者との感覚の違いに触れ、価値観の違いを共有し、多様な世界の在り方から表現の可能性を探っていきたいと思います。ひとりひとり異なる感覚をテーマに、さまざまな人が対話し、わたしと誰かの何かがつながったり、離れたり、すれ違ったりする感覚を味わい、そこから、わたしたちひとりひとりの心の内を見つめると共に、身近な誰か、遠くの誰かについて、改めて考える機会となれば幸いです。

最後になりましたが、貴重な作品をご出品くださいました作家と、本展の実現のために貴重なご助言とご協力を賜りましたすべての皆様に、心からお礼申し上げます。

2024年5月

(公財) 東京都歴史文化財団 東京都現代美術館
東京都渋谷公園通りギャラリー

〈感覚の点P〉

「点P」とは、数学の問題に多く用いられる仮の記号です。面積を持たない点Pには位置だけがあり、線分上を一定の速度で動くなどします。本展覧会ではこの任意の点Pを、「ある人が持つ独自の感覚」になぞらえてみることにしました。というのも両者には、何らかの関数の一部を担っているという、ゆるやかな共通点があるように見えるからです。

点Pに具体的な位置や動きが与えられると、何かの時間やどこかの面積が定まります。同様に、身体へある刺激が与えられると、人は特定の感覚を得るでしょう。このように「感覚」や「点P」には、そこへ具体的な内容が与えられることで別の何かを明らかにする、関数とのかかわりがありそうです。

今村遼佑と光島貴之は、ともに美術作家としてそれぞれの活動を続けてきました。2023年に京都で開催した展覧会「今村遼佑×光島貴之 〈感覚の果て〉」では、お互いが日常の中で気になる感覚の交換を重ねるリサーチと、それらを経て制作した作品を発表しています。

人にはそれぞれの関数があり、まったく同じ刺激を受けたとしても得られる感覚は少しずつ異なります。ここでの関数とはすなわち感受性のことであり、今村と光島の共有体験が異なる作品として結実するのは、二人が異なる感受性を持つためです。そこには晴眼者／視覚障害者という区分では計り知れない複雑さが潜んでいます。

本展覧会ではその複雑さを複雑なままに、このリサーチ・プロジェクトを、今村と光島からより多くの人へと広げてみたいと思います。他者の内部で生じる感覚のプロセスを見ることによって、誰かの感受性を推し量ること。次はそれ自体が刺激となって、今までぼんやりとしていた自分自身の関数がはっきりとし始めるかもしれません。

空間上では個々に位置するそれぞれの点Pが、互いに独自の動きをしながら時に近づき、また離れていきます。その先には、また別の感受性を持った未だ見ぬ点Qとの出会いが待っているかもしれません。今村と光島における感覚のプロセスや、会期中のワークショップなどを通して、来場者のみなさまがさまざまな他者のさまざまな感受性に触れる機会となれば幸いです。

アトリエ みつしま
高内 洋子

今村遼佑

二年ほど前に光島さんと二人で展覧会をやろうという話になり、それならただ単に一緒に展覧会をやるだけではなく、感覚の交換をテーマに月に一度ぐらいの頻度で一緒に何かを行うことにした。以降、頻度は様々だが、お互いの気になる場所に出かけたり、何かのイベントを行ったりといったことを周りの人も巻き込みながら続けてきた。

これはコラボレーションの作品を作ることを目指しているわけではない。作品を作る技術の交換をするわけでもない。それは、例えば、畑を耕すのに似ていると思っている。お互い自分の畑を耕して、時々こんな肥料を使っているとかこんな作物を育てているとかそんな情報交換をして、時には一緒に実験をして、また帰って自分の畑を耕す。それぞれの場所で全然別の作品を作ればいい。なぜ僕と光島さんなのかは、たぶん、けっこう遠いのかと思っていたら、ある場所では畦道を挟んで隣というぐらい畑が近かったことに気づいたからだ。

この世界はどんなところだろうか、そんな不思議に子どものころから魅了されてきた。美術を学ぶようになってその自由度に触れて、ある場所の光景や音の環境、ふとした瞬間に触れる匂い、そのような世界から受け取る不確かな知覚を確かめたくて作品を作ってきた。光島さんは、ある部分においては僕にはない角度、深さでこの世界を捉えているだろう。それがどんなものか知りたい。それと同時に、お互いの作品の話をしていると全く同じような捉え方で世界を見ている場合も多いことを知った。

今回のイベントのワークショップ用にさまざまな触感の素材がパッチワーク状になった机を制作した。参加者には、脈絡なく継ぎ接ぎになった質感を触りながら個人の記憶を探り、それを話してもらおう。それは同じテーブルに座る人の記憶を何かしら刺激したり、あるいはしなかったりするだろう。

僕と光島さんの隣接の仕方は、一つのケースに過ぎない。美術作家同士の美術を通したコミュニケーションが可能な隣接のあり方だ。世の中には様々な隣接の形があるのだろう。僕たちのケースが皆さんの想像力を刺激し、見えにくい場所で隣り合う人々との新たなコミュニケーションの種となることを望んでいる。

いまむら りょうすけ

1982年生まれ。京都府在住。インスタレーション、映像、絵画、テキストなど多様な手法で、生活の中のささやかな出来事を取り上げ、見る人の記憶や感覚に働きかける表現を行っている。2018年より、きょうと障害者文化芸術推進機構が運営する art space co-jin

(京都府)にて携わるプロジェクト「アートと障害のアーカイブ・京都」を通して光島と
出会う。出展歴は、2011年「ヨコハマトリエンナーレ 2011」横浜美術館(神奈川県)、
2011年「第5回 shiseido art egg」資生堂ギャラリー(東京都)他、多数。欧州にてアー
ティスト・イン・レジデンスや在外研修などを経験してきた。コレクション：兵庫県立美
術館(2017年)。

光島貴之

2023年に京都で開催した企画展〈感覚の果て〉をさらに掘りさげたものとして東京で発表する機会をいただきました。5月にはそのイベントとしてこれまでの様子を少し紹介しながら、《触覚のテーブル》を使ったワークショップを試みます。この触覚経験をもとにして、東京での新たな一步を踏み出せればと思っています。

出品作品としては、《手でみる野外彫刻》でぼくの触覚経験を映像で追体験していただき、《さやかに色点字—中原中也の詩集より》で作品を見て、さわっていただきます。

《さやかに色点字》は、ぼくが高校時代に親しんだ中原中也の詩編から印象に残る1行を選びだし、それを「色点字」とかたちとして作品にしました。例えば、「ふむ じやりの おとわ さびしかった」という1行は、音についてのぼくの記憶を刺激します。「えんがわに ひが あたってて」という1行からは、幼少期の明暗が見えていたときの視経験を呼び起こされ、縁側の木のぬくもりが触覚的に想起されます。

その他、中也の詩編を触読して感じとった「通りすぎた時間」や、「視経験として蘇ってくる記憶」、「存在の不安と喪失感」などを部分的に切りとり、ぼくの中から呼び起こされる感覚でかたちを作っています。

これらの作業を通してぼくの場合はさらにさかのぼって、10歳ぐらいで完全に見えなくなっていく時期に獲得した「色点字」という共感覚を再現することになりました。ぼくだけが思いうかべられる映像的記憶ですが、いま一度この記憶を再現することで、感覚の果てへとさかのぼっていきたいと思います。

さてこの先にはどんな果てが待っているのか。そして、果てまでさかのぼることで、今村さんやみなさまとの切断面および接続面が明らかになることを期待します。

色点字と共感覚:

「ひとつの感覚の刺激によって、別の知覚が不随意的に起こる」現象を共感覚という。音を聴くと色が見えるという「色聴」や、文字を見ると、そこにはないはずの色が見える「色字」が代表的である。

光島の場合、視力が徐々に失われていった10歳頃に点字の文字のかたちに対応して色を感じるようになったと言う。例えば「あ」は、裸電球の色の肌色とか、「い」は、くすんだ青（ざらつきあり）などの色を思いうかべている。ラインテープやカッティングシートで絵を描き始めた1997年頃にそれらの色と五十音の関係を忘れないように言葉にして書き残したものを「色点字」と呼んでいる。

みつしま たかゆき

1954年生まれ。京都府生まれ。10歳の頃に失明し、鍼灸を生業としながら、自身の身体感覚を投影した新たな表現手法を探求してきた。テープやカッティングシートを用いた

「さわる絵画」の他、「触覚コラージュ」*、「釘シリーズ」など独自の方法で制作する。2020年、バリアへの新しいアプローチを実践する拠点として「アトリエみつしま」を開業。主な出展歴は、2003年「KALEIDOSCOPE 6人の個性と表現」世田谷美術館（東京都）、2019年「MOT サテライト 2019 ひろがる地図」東京都現代美術館（東京都）他、多数。コレクション：東京都現代美術館（2019年）他

*鑑賞者は、多様な手ざわりを組み合わせた素材に触れることで、光島が感覚を通して感じた世界をたどる。